知床博物館研究報告 Bulletin of the
Shiretoko Museum 38: 25–27 (2016)

知床博物館所蔵のカワウソ毛皮

中川 元

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 49-2，斜里町立知床博物館

The Fur of the River Otter *Lutra lutra* Stored at Shiretoko Museum

NAKAGAWA Hajime

Shiretoko Museum, 49-2 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan ✉*hajime-n@apost.plala.or.jp*

The fur of the river otter *Lutra lutra* captured on the Shari River in 1955 is stored at Shiretoko Museum. This is the last record of the wild river otter in Hokkaido.

はじめに

ニホンカワウソは，ヨーロッパからアジアにかけて広く分布するユーラシアカワウソ *Lutra lutra* の亜種とされ，本州以南亜種 *Lutra lutra nippon* と北海道亜種 *Lutra lutra whiteleyi* の2亜種からなる．一方，本州以南亜種を別種 *Lutra nippon* とする意見もある（Imaizumi & Yoshiyuki 1989）．かつては国内に広く生息していたが，毛皮目的の乱獲や生息環境の悪化により数を減らした．1928年には捕獲が禁止され，1964年に国の天然記念物に，翌1965年に特別天然記念物に指定されている．なお，北海道のカワウソについての分類学的位置付けがまだ定まっていないため，本稿では以下「北海道のカワウソ」として扱う．

北海道のカワウソは，早くから毛皮獣として捕獲されていたが，明治30（1897）年代以降の乱獲により急激に減少したと考えられている（犬飼 1938）．大正時代から昭和初期には捕獲数もごくわずかとなった（河井 1997）．知床半島のカワウソは狩猟統計上では大正時代中期を最後に斜里側から姿を消し，その後昭和時代前期までは根室側の標津川水系を中心に少数が生息していたとされる（米田 1981）．北海道内では，1960年代–80年代に目撃例や足跡の発見例がいくつか報道されたが，確実にカワウソと判定されたものは無かった．1989年に旭川市で発見されたカワウソの死体は，詳細な調査の結果，飼育下にあった個体が死亡直前に野外に放たれたものと結論づけられた（北海道保健環境部自然保護課 1990）．これらから，知床博物館が所蔵する1955年に斜里川水系で捕獲されたとするカワウソの毛皮（図）は，北海道における最後の記録と考えられる．

この毛皮資料は知床博物館開館間近の1978年9月にA氏（仮名）より寄贈を受けた．その7年後，A氏より捕獲時の詳細な状況の説明があり，あわせて寄贈者氏名と取得経緯を公表しないことを求められた．すでに資料受領から37年，聞き取りから30年が経過していることや，北海道におけるカワウソの最後の記録として重要であることから，資料受領時の記録と後日の聞き取り記録を以下に報告する．

資料受領時の記録

カワウソ毛皮資料受領時の記録を表1に示す．

資料は頭部から腰にかけて全ての刺毛（上毛）が抜かれており，綿毛（下毛）だけになっている．顔部分と尾部は刺毛が残されている．全体茶褐色で傷みは少ない．

毛皮のため尾長を正確に計測することは難しいが，尾率（尾長/頭胴長）は50%台と推定される．

図. 知床博物館が所蔵するカワウソ毛皮,

表 1. カワウソ毛皮資料受領時の記録.

資料名	ニホンカワウソなめし皮
受入日	1978 年 9 月 29 日
受入場所	しれとこ資料館 (北海道斜里郡斜里町本町 42) [a]
寄贈者	A 氏. 1911 年生まれ. 網走支庁管内在住 (当時)
受入担当者	中川 元 (斜里町教育委員会文化財課文化財係: 当時)
資料サイズ	全長 111.5 mm, 尾長約 39.0 mm (頭胴長約 72.5 mm)
取得経緯	1978 年 5 月に網走市で質流れ品の即売において購入した. 採集地・時期等はわからなかった. ただ, 1955 年頃の斜里川支流来運川で工事があった当時, 工事人夫が捕獲したものの可能性がある [受領時の A 氏説明].

[a] しれとこ資料館は同年 12 月開館の斜里町立知床博物館の前身.

表 2. 1986 年の聞き取り結果.

日時	1986 年 1 月 17 日 09:00–11:00
場所	知床博物館事務室 (北海道斜里郡斜里町本町 49)
聞取り者	中川 元 (斜里町立知床博物館学芸係: 当時)
結果	
取得経緯	A 氏がカワウソを捕獲し, 自ら皮をなめして保管していた
捕獲時期	1955 年 8 月中旬
捕獲場所	北海道斜里郡斜里町西 5 線, 斜里川支流秋の川
捕獲者	A 氏 (当時は斜里町内に居住していた)
捕獲状況	カワウソは, サクラマス捕獲目的の鱒網に水中で絡まっていた. 発見時生きていたため, 網走支庁に届けようとしたが途中で死亡した. その後は隠していた. 鱒網は密漁網である. 密漁の事実を知られたくないため, 自分自身でなめし処理をして保存. 刺毛を抜いて襟巻きとして使っていた. 私は当時監視員をしていた. また, 密漁が発覚すると狩猟免許が剥奪されるため, 公表はできなかった. 1978 年の寄贈時には曖昧な話しかできなかったが, 私も年であり, 正確な捕獲記録を残しておきたい. しかし公表は避けていただきたい. 密漁は 1953–54 年頃から始めたが, このカワウソが初めて見たカワウソだった. 捕獲当時から 10 年ほどの間, 秋の川や来運川でカワウソ目撃例が多くあり, 北海道大学の犬飼哲夫博士も調査に来た. しかし皮を見せることはできなかった. この捕獲後, 8 ミリ映写機や望遠レンズを用意したが, 記録にとどめることはできなかった.

Imaizumi & Yoshiyuki（1989）は，本州以南（本州，九州，四国）のカワウソの尾率は60 –70%，ユーラシア，北海道のカワウソの尾率は53–60%としている．

1986年の聞き取り結果

寄贈から約7年後，1986年1月に知床博物館を訪れたA氏は，寄贈時の説明を取り消し，表2のとおり毛皮の取得経緯を説明した．

また表2に示した内容のほかに，捕獲後の目撃や足跡に関する話，当時他の町民からA氏が聞いた複数のカワウソ目撃情報，斜里町内の別のカワウソ毛皮所有者（戦前に町内で捕獲されたカワウソ）について話があった．

おわりに

日本におけるカワウソの最後の記録は，本州では1954年の和歌山県の記録，四国では1979年のk高知県の記録である．そして北海道ではこの1955年の記録が最後となる．2012年の第4次レッドリスト改訂において本州以南亜種とともに，北海道亜種が絶滅種に判定された（環境省2014）．なお，この毛皮資料の系統や来歴に関する情報を得るため，2005年に研究機関に依頼してDNA鑑定を試みたがDNAの増幅は見られなかった．なめし加工されていることがDNA検出を難しくしている可能性があった．また，知床ではカワウソの生息復元へ向けた試みが知床博物館と知床財団によって開始されている（石城2005; 村上2015）．このカワウソ毛皮資料が絶滅種の系統や生息復元に向けた研究の材料として役立つことを期待するとともに，資料の寄贈者に厚く感謝申し上げる．

文献

北海道保健環境部自然保護課（編）．1990．旭川のカワウソ．78 pp．北海道保健環境部自然保護課，札幌．

Imaizumi Y. & Yoshiyuki M. 1989. Taxnomic status of the Japanese otter (Carnivora, Mustelidae), with a description of a new species. Bulletin of the Nationai Science Museum,Tokyo, Series A, 15: 177–188.

犬飼哲夫．1938．北海道に於ける野生毛皮獣減少の原因考察．日本學術協會報告13: 464–469.

石城謙吉．2005.「100平方メートル運動の森・トラスト」と絶滅種の復元．知床博物館研究報告26: 25–27.

河井大輔．1997．毛皮を狙われた水獣たち．FRONT 8: 26–27.

環境省（編）．2014．1哺乳類．レッドデータブック2014：日本の絶滅のおそれのある野生生物．132 pp．ぎょうせい，東京．

村上隆広．2015．失われた森の姿をもとめて：ロシア・沿海地方，ハバロフスク地方のカワウソ調査記．Arctic Circle 94: 14–17.

米田政明．1981．知床半島の中小型食肉類．北海道生活環境部自然保護課（編），知床半島自然生態系総合調査報告書（動物編）．pp. 114–125．北海道，札幌．